

月へ

宮崎県立延岡星雲高等学校 三年 小田原 迦凜

私は幼い頃から人見知りが激しく知らない人はもちろんだが年に数回しか会わないような親戚との挨拶でも勇気が必要なほどだった。親からいつも挨拶はしっかりしなさい、人として礼儀だよときつく言われても人と会ってしまうと周りの音がスッと消えて、とてつもなく恐ろしい所に一人ポツンと取り残されてしまったような気持ちになってしまう。そして熱くなっていく頬をもてあましながら頭をペコッと下げるのが私にできる精一杯の挨拶だった。

そんな私も小学校に入学し少ないながらも友達も出来、楽しいとまではいかないが軽い冗談を言えるまでになった。人と接することに少しずつ慣れてきた小学校六年の春休み、ある一人の女の子と出会った。その女の子は、真っ白なワンピースを着てその白さに負けないくらいに肌が白く優しそうな雰囲気がるでたんぽぽみたい な印象だった。近所ではあまり見かけないその女の子を見たたん、私の体を緊張が一気にかけめぐりグツと固まってしまった。そんな私のことを知ってか知らずかその女の子は大きな声で「こんにちはー！」とニコツと満面の笑みで私を真っ直ぐ見つめて挨拶してきた。「あっこんにちは」と蚊の鳴くような声でいつもの恥ずかしさで熱くなっていく頬を隠すように俯いて私は挨拶を返した。またやってしまったと一人反省会を頭の中でしようとしていたらその女の子が私の手を握って「名前は 何て言うの？」と急に私の顔をのぞきこんで話しかけてきた。あまりの顔の近さに思わず一步後ずさりして「かりんです……。」と先ほどよりもっと小さな声で答えた。その女の子は母の知り合いの娘さんで春休みに関東の方から帰省しているとのことだった。私のドギマギしている様子を察したその女の子の母親が「ごめんなさいね、距離感が近いよね、びっくりしたよね。」と私達に近寄って謝ってきた。その女の子は、私と同年で生まれた時から視力が弱く手で触れたり、声や音を聴いたり、肌で感じたりして相手のことや物の形や性質を知ることなどを教えてくれた。その話を聞いた時、さっき一步後ずさった自分がすごくダメな人間に思えて、恥ずかしくなった。そして逆に一步前に出て私からその女の子の手をギュッと握って「よろしくね。」と言った。その女の子は大きな花がパーツと咲いたような明るい笑顔で私の手を握り返してきた。その女の子の手はとても温かくて私の緊張もあつという

間にスーッと解けた。

それから私達二人は近くの公園で今まで会えなかった時間を取り戻すかのように自分のこと、家族のこと、好きなアイドルのことなどをたくさん語り合った。その会話の中でその女の子が今の生活はきつい時も悔しいこともあるけどとても幸せであることを穏やかな表情で私に話していたのに急に真面目な顔になって、「触りたくても感じたくてもなかなか難しいものがあるけど何だと思う？」と質問してきた。私は必死に頭の中をかき回して答えを探した。そして悩みに悩んだ末、「神様？人の心？」ととんちんかんな自分でも言ってる途中で恥ずかしくなってしまうような答えを顔を真っ赤にしながら答えた。しばらくの沈黙の後、クスッと笑われて星や月って太陽みたいに日差しの暖かさを感じたり風や雨のように肌で感じたり出来ないからすごく興味があることを教えてくれた。童謡でもおとぎ話でも特に月はよく使われていることで月への憧れが強くなっていったらしい。私にとっては晴れた日の夜であれば必ずそこにある月。その女の子の月への想いを聞いて私なりにどうにかして月のイメージだけでも伝えたいと強く思った。「月は太陽みたいに元気いっぱいではないけど静かに暗い夜を優しい光で照らしてくれる。寝れない夜も夜が怖くて心細い時も街の電気が少しずつ消えていく中、ただ月だけが朝が来るまでずっとそっと照らしてくれるんだよ。」と伝えた。黙って聞いていたその女の子が私の方を向いて「やっぱり月って素敵だね。月がどんな感じか見えた気がするよ。ありがとう。」と言ってくれた。その女の子の表情が私には暗い夜を照らすきれいな月のように見えた。あまりにも真っ直ぐな月への想いに自分の語彙力、表現力の無さにもどかしさを感じ、一日一日一つ一つを丁寧に生きているその女の子の生き方が私の心に響いた。

新学期が始まる前、その女の子は関東の方へ帰っていった。感染症の流行などであれから会えていないけどその女の子は今どんな月を見ているのだろう。あの日、語り合ったり笑い合ったりしたその女の子の笑顔が自分が苦しい時、悲しい時私の心の暗闇をそっと照らしてくれる。暗い夜を静かに朝が来るまでそっと照らしてくれる優しい月のように。